

廬山慧遠の見仏

大窪 康 充

《一》廬山における念仏実践の誓約が、後世に多大な影響を及ぼしたことは周知のとおりである。そしてその教義の基盤が、無常観と三世因果応報の上に立てられていることは慧遠の『念仏三昧詩集序』の内容や劉遺民の立誓文などの指摘から認められる。応報という以上は、人間の存在が一生に尽きるものでなく、輪廻を繰り返すということを要請しているわけだが、慧遠は「神」というものをまさしく輪廻の主体とし、それが輪廻する限りは形（肉体と情）に拘束され、一方ではその拘束を離れば形とは別な、超越的な、絶対者となることを主張する。そしてこのような「神」の超越性が、そのまま慧遠の如来観・法身観と結び付き、さらには見仏観の基底をなしていると思われる。『念仏三昧詩集序』において、輪廻の拘束を離れた「神」を体得するものが絶対者たる如来といっていることは、如来を一つの実在として見なすことになり、それ故に慧遠の見仏三昧の終局目標が、自ずと色身阿弥陀仏の現見のみに止まることになる。いわゆる慧遠の念仏が、実際に『般舟三昧経』を拠り所としているにもかかわらず、この「経」が有意とする般舟三昧の目的を正確に捉えるものではなかったといえる。もっといえば『般舟三昧経』の本意とする見仏は、色身としての阿弥陀仏を越えて、生滅去来のない法身や実相を証

悟することにあるが、慧遠の見仏の特徴として、無制限に色身阿弥陀仏の現見を終局の目標としていることが指摘できるのである。そのことは『大乘大義章』法身義における、鳩摩羅什に対する慧遠の質疑の内容から充分認識できるところである。

《二》そこでいう慧遠の質疑とは、「真法身の無色」と「真法身は十住菩薩のみの所見」という二点に終始するものであり、潜在的には見仏の問題を取り扱っているといえよう。初めの「法身の無色」に対する不審は、真法身の中の法身菩薩に関わることから「妙行により法性から生ずる身」という内容についての疑問である。慧遠は「身」というものを個体的に捉え、また「生ずる」という以上は、何か煩惱・残気などという根拠由来を考えないわけにはゆかなかったのである。一方「真法身はただ十住の所見」に対する疑問は、直接慧遠の見仏観に基づくものであるが、色身の現見のみに満足していた慧遠にとって、十住菩薩のみが仏を見るということとは、彼の見仏観を根拠から覆すものであったといえよう。ならば慧遠は、色身の見仏を通して、具体的に一体何を期待したのか。『大乘大義章』念仏義の質疑において、慧遠は仏の威神力というものを、夢の譬えでいうような自分の心の中に求めるのではなく、あくまでも実在的に外から加えられるものと了解し、それによって修行が進み、また解脱が得られると考えていた。よって慧遠が羅什との交渉によって、あれだけ執拗に「真法身の無色」と「真法身が十住菩薩のみの所見」という二点をめぐって疑難したのは、仏の威神力が外から加えられるという期待と確信から、般舟念仏を功高易進として捉えていたことによる。このようなことから慧遠の見仏の終局目標は、『般舟三昧経』の本意と本来的に異なった、色身の阿弥陀仏の現見のみに満足し止まるもの

であったといえよう。

《三》ところで慧遠が、このような羅什との交渉によって思想的な影響を受けたことは充分予想できるところである。実際に慧遠は羅什に対する尊敬の念をあらわし、またその教学的な面においては部分的に継承していた。ならば慧遠の見仏観において何らかの影響があったのか。「大乘大義章」の慧遠の見解を見る限りでは、彼の見仏観が、功高易進として外から加えられる仏の威神力を期待することによって、その終局の目標が「般舟三昧經」の本意とは異なった色身の現見に止まっていた。しかしこの点においては、慧遠の見仏観に何らかの変化を看取することができるのではなからうか。羅什と交渉したことによって造られた『大智度論抄序』では、「法とは別に変わったものではなく、始終を通じて空であり、究極においては、ともに汚れないもので、(ここでは)有と無(の対立)は一つに帰するのである。故にこの境地に遊ぶものは、心に思慮する必要がなく、智は対象をもたない」と述べている。羅什と交渉する以前の書、『念仏三昧詩集序』では「令入斯定者、味然忘知、即所緣成鑿」とあって、どこまでも対象に即して(精神の靈妙な)照らしうつすはたらきを現じるといいうものであったが、それがここでは、始終通じて空とする法の境地に遊ぶ者は、「智に所緣なし」と無制限に対象に固執しない意味を述べている。さらに「修正方便禪經統序」においては「異族同氣幻形告疎。入深緣起見生死際」とあって、幻の肉体というものを戒めており、さらには「非夫道冠三乘智通十地。孰能洞根於法身。帰宗一於無相」というように、達摩多羅と仏大先を(菩薩の)十地に通ずる智慧をもつ人として賛嘆し、ここでは法身の無相といった意味を語っている。このように、「智に所緣なし」、「幻形疎

を告ぐ」、あるいは「宗一を無相に帰す」といった内容から、慧遠の念仏実践の対象が、色身から無相を強調する傾向へと移行し、見仏の終局目標そのものに羅什からの影響が認められるのである。《四》慧遠が生涯を通じて小乗禪を重視したことは、『大乘大義章』における遍学の問答や、長安教団から擲出された仏陀跋陀羅を大いに歓迎した態度から認められる。慧遠は羅什を賛嘆する反面、何らかのわだかまりをもっていたことから、彼のいう大乘精神に対し全面的に同調することはなかった。それ故に羅什との交渉によって、慧遠の思想がどれだけ影響を受けたのか、このことは結論的にいって判然とせず、また慧遠の見仏観における本質的な転換も充分には認められない。しかし上記のような仏を見るという点において、終局的には無相を強調する傾向から、見仏の目標そのものに有相身から無相身といった変化を看取することができるのである。

注

- ① 木村英一編『慧遠研究』(研究篇)の梶山雄一「慧遠の報応説と神不滅論」
- ② 大正蔵五五・七六上
- ③ 大正蔵五五・六六上
- ④ 大正蔵五五・六六上

帰宗一於無相」というように、達摩多羅と仏大先を(菩薩の)十地に通ずる智慧をもつ人として賛嘆し、ここでは法身の無相といった意味を語っている。このように、「智に所緣なし」、「幻形疎